

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

2011 年

No. 1

2011年4月15日(毎月15日)発行

財団法人 日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info@jase.or.jp URL http://www.jase.or.jp 発行人 松本清一 編集人 本橋道昭
© JASE. 2011 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

JASE関西性教育研修セミナー2010冬講演要旨

「性科学／教育の過去・現在・未来」…………… 1

北丸雄二のニューヨークレポート①…………… 6

「ありのままのわたしを生きる」ために①…………… 7

今月のブックガイド…………… 8

JASEインフォメーション…………… 9

性科学／教育の過去・現在・未来



ハワイ大学医学部教授 ミルトン・ダイヤモンド

「次世代に語り継ぐ SEX & SOCIETY (性と社会)」をテーマに、ミルトン・ダイヤモンド博士と池上千寿子氏を講師に招いて、2010年12月12日、大阪・梅田で「関西性教育研修セミナー 2010 冬」が開催された。そのミルトン・ダイヤモンド博士の講演要旨を掲載する。

私の研究歴もずいぶんと長くなりますが、最初に扱ったのはモルモットです。当時、性科学を専攻している人はおらず、関連する研究領域といえば、生殖に関するものぐらいでした。

1930年代、ナチス政府によって焚書が行われました。ドイツには、有名なセックスに関する図書館がありましたが、セックスに関する本というのは、すべて燃やされてしまったわけです。

この絵(資料1)は、米国のコムストック法(1873年)に関連するものです。コムストック法とは、「反道徳的な使用目的での猥褻文書と物品の取引・流通の禁止法」といって、性に関す

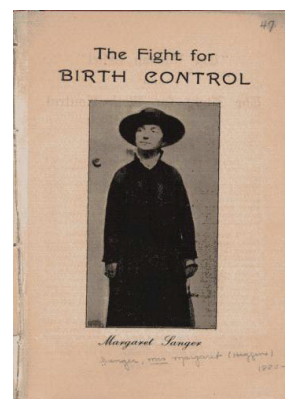


資料1

るあらゆるもの(書物や避妊や人工妊娠中絶に使われる道具や論文、広告や情報など)を郵便規制する法律です。ニューヨークで「悪徳撲滅委員会」を組織したコムストックらが推進しようとしていたのは、結婚まで性交渉をしてはならないという禁欲主義です。

彼らが使った基本戦略は、「セックスをすれば、淋病、梅毒に罹患しますよ」という脅しでした。その一例としては、精巣が縮んだ状態の絵があり、「マスターベーションするとこんな風に精巣が縮んでしまうぞ」と脅すわけです。もちろん、嘘です(笑)。

この本(資料2)は、家族計画の推進で非常に有名なマーガレット・サン



資料2

ガーによって書かれたものです。彼女は1914年に月刊誌『ウーマン・リベル』を発刊するなど、避妊への意識向上を図る活動を始めましたが、コムストック法で起訴され、1915年に英国へと向かうことになります。当時は、家族計画の推進すら違法だったのです。勉強したり、公に情報提供してもよいとされたのは、妊娠中の胎児の成長といった、妊娠に関することぐらいで、どうやったら妊娠に至るのかといったことに関心をもつべきではない、とされていました。

■ 性を科学する時代の幕開け

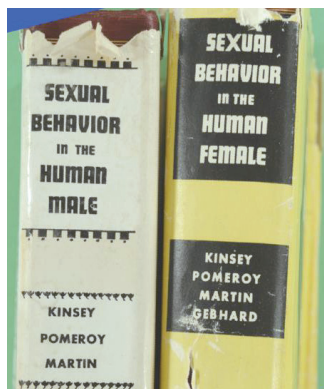
しかし、アルフレッド・キンゼイ（資料3）が活躍した1940～1950年代から、少しずつ事態は変わり始めます。彼は、大学の要請で結婚や家族に関する授業を担当していました。結婚や家族の話といっても、学生はもちろん、セックスに関する質問もしてきます。そうした学生に対して彼は、「私にはわからない。これは調べなければならない」と答え、調査を始めたのでした。

彼らの調査研究の成果として出版されたのが、『男性の性行動』（1948）と『女性の性行動』（1953）の2冊です（資料4）。この2冊は、後に『キンゼイ・レポート』として有名になりました。当時の性に関する調査研究といえば、もっぱら寝室で起こることに関心もたれていましたから、ジェンダーに関連する事柄や

ジェンダー・アイデンティティといった話題は扱われていません。

こうしたキンゼイらの研究に対して、社会は非常に早い反応をみせましたが、そのほとんどが否定的なものでした。

1960年代と1970



資料4



資料3

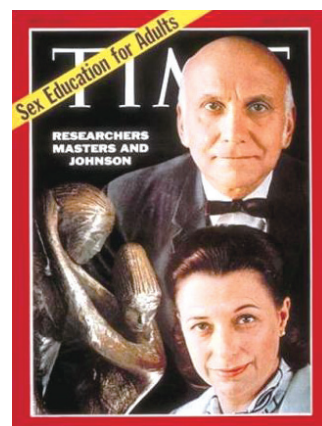
年代には、マスターズ&ジョンソン（資料5）による人間の性反応に関する著書が相次いで出版されました。こうしたキンゼイやマスターズ&ジョンソンらの研究によって、米国社会にも変化がみられるようになりました。性について、適切に、しかも科学的に研究することができる、と考えられるようになってきたのです。

1965年には、画期的な判決が下されています。それより以前、といってもそれほど大昔の話でもないわけですが、結婚している夫婦に対してすら、医師が避妊の情報提供をすることが法律上違法であるとされていました。コネティカット州の家族計画連盟重役だったエステル・グリズウォルドは、このことで有罪判決を受けましたが、1965年の連邦最高裁で「プライバシーの権利」を理由に逆転無罪を勝ち取りました。

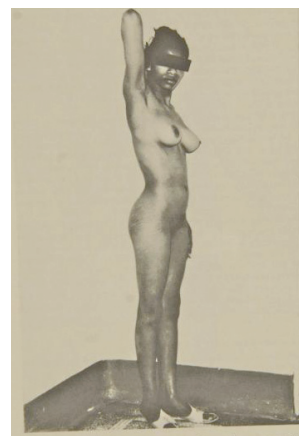
私が最初に教職に就いたのは、ケンタッキー州のルイスヴィル大学医学部で、この写真（資料6）の方は、私が最初に出会ったインターセックス当事者です。染色体型はXYで精巣もあるのですが、腕を上げた脇には毛がありませんし、非常に女性的な外見であることから、「ふつう」ではないと言われて、私のところを訪ねてこられました。当時の社会は、性について「見ざる、言わざる、聞かざる」という態度が大半を占めていましたから、こういう状態についての研究がなく、生殖および内分泌の研究をしていた私に紹介されてきたわけです。

■ 性と社会と政治

私が医学部の学生を対象に教えていた性に関する授業（資料7）は、当時としては珍しいものでした。後に、より多くの医学部がこうした授業を開講するようになりました



資料5



資料6



資料7

が、全国的にも最初期の1つだったと思います。医師や医師になる学生が性についての知識をもつことは、もちろん大切なことですが、私は、子どもや若者も性についての知識をもつべきだと考えました。

しかし、どういった性教育が提供できるかというのは、時の為政者の態度や考え方にも大きく影響されます。たとえば、ブッシュ前大統領は性教育に否定的で、家族計画、人工妊娠中絶、そして性教育に対して、さまざまな制限を加えました。それに対して、オバマ大統領の態度はだいぶ違います。彼は、家族計画、そして統合された性教育を支援する姿勢を示しています。

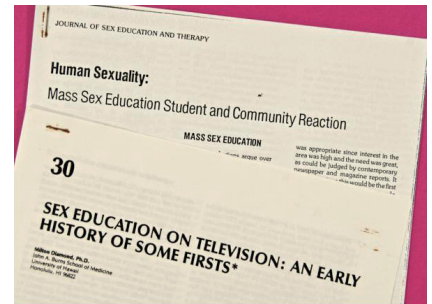
一方で、教師の多くにまだ保守的な考えがみられるという問題もあります。性について授業をすることは構わないけれども、教える内容は禁欲であるべきだ、という態度は根強くあります。しかし、ある調査では、一般大衆の76%が性教育（包括的セクシュアリティ教育）が望ましいと答えています。

ハワイは最初に人工妊娠中絶を合法化した州の1つですが、中絶が米国社会の大きな関心事となったのは1970年代のことです。1967年にハワイ大学医学部に転任した私も、性と家族計画、性教育との関係について研究を始めました。

研究していくうちにわかったことは、中絶はだれにとっても深刻な問題であり、簡単に人工妊娠中絶という結論を導き出す人はいない、ということでした。1971年に発表した論文（資料8）で私たちは、（禁欲を強制するばかりで、中絶を違法とする）政府こそが法律違反をしている、という考え方を示しました。

さらに1970年代には、私は性について教える別の方法を思いつきました。テレビを利用した授業です。ハワイ大学が、テレビで放送された性教育を正式な授

業として認めてくれたおかげで、学生に単位を出すこともできました。時代は変わりつつありました。



資料8

性と文化

時代における変化だけでなく、性については文化によってさまざまな違いがある、ということを常に心にとめておかねばなりません。性教育や性に対する考え方や態度には、異なる文化で大きな違いがみられます。

日本は、伝統的にセクシュアリティについて非常に寛容な文化であったことが知られていますね。この枕本（資料9）はその1例で、新婚のカップルに対して、どういうふうな性行為をするのかを教えています。



資料9

これは香港で撮影したペニスの形をした岩石（資料10）で、繁殖と生殖を願って、この岩石に祈りを捧げているところですね。インドにもエロティックな石像がたくさんある有名な寺院をはじめとして、さまざまにこうした物が残されています。



資料10

性教育

さきほど、1970年代になって、性教育が医師に限らず、大学生、高校生あるいは幼稚園児など、その対象を広げて行われるようになってきたと申し上げました。しかし、そこでもまだ、解決すべき問題は残っていました。だれが性教育を教えるのか、ということ

す。年齢がいったる人のほうがいいのか（ほとんどの場合は、一番年齢が上の人選ばれていたようですが）、結婚していなければならないのか、どういった態度の人がいいのか、どんな専門知識が必要なのか。

当初は、ほとんどの先生が、性について教えることについては「素人」だったわけです。しかし、性教育を教えるためには、専門知識を身につけなければならない、専門の教育課程を修了しなければならない、というふうに変わってきました。私は、1970年代後半に、日本の方々にも研修をするようになりました。

性教育に携わるなかで、後に私たちが気づいたことですが、ピア・エデュケーション（自分と同世代の人による教育）のほうが、性については、より熱心に話を聞いてくれる、うまくいくこともあります。

教育をするに当たって一番大切な要素は、まずきちんとした準備をすること、そしてオープンな態度をとることです。性に関する情報は、大人だけでなく子どもが入手できるものだし、またそうでなければならないと私は思います。

性教育をめぐる議論で、もう1つ論点になるのが、何を教えるか、ということです。性にまつわる負の側面（望まない妊娠や性感染症など）だけではなく、正の側面について教えてもいいのかどうか。性が悪い結果ばかりを引き起こすものだったら、だれも性行為をしないと思います。

1980年代には、私が書いた教科書（資料11）が出版されました。嬉しいことに、この本は日本でも、宮原忍先生によって日本語に翻訳され、日本の大学で初めて教科書として採用されたと、お聞きしています。幸運なことに、私が上梓した本は、たくさんの外国語に翻訳されています。

1980年代になって、エイズが世界的に流行し始めたことは、性教育推進の大きな追い風になるものでし

た。しかし、新たな問題も浮上してきます。エイズについてだけしか教えない、性行為に触れることなく、HIVの感染予防についてだけ教える、といった風潮が生まれたことです。

この写真（資料12）は、「見ざる、言わざる、聞かざる」を表現したものですが、従来の3匹に加えて、「（セックスを）せざる」という意味の4匹目が追加されていますね。



資料 12

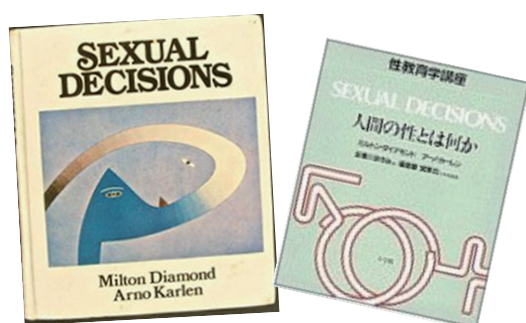
■ 新しい時代の、新しい話題

社会における新しい動向、変化を加速した別の要因は、フェミニズムの台頭によって、女性たちが発言するようになったことです。女性たちは、従来の性や性教育が、男性の視点に偏っていると指摘しました。そうして、新しく登場した話題の1つが、セクシュアル・ハラスメント（セクハラ）です。

セクハラというのは、性的に相手の弱みにつけ込んだり、利用したり、相手が不快に思うことをする、というものです。米国では、最高裁判事の1人がセクハラで訴えられ、大きな社会的関心を集めることとなりました。

1990年代に新しく登場した論争の1つには、同性婚をめぐる是非もあります。米国ではこれに反対する人が多い。しかし私は、学生が状況について理解できるよう、同性婚についても授業で扱ってきました。ちなみに、性教育で何を教えるべきかについては、米国にある50州のそれぞれにおいて、異なる法律が設けられています。

インターネットが普及したことで、検索できるポルノの数が飛躍的に増えました。ほとんどの教育者は、ポルノが性教育には使えない、といいます。しかし、最近論文で発表したのですが、チェコ共和国では、ポルノの数が増えるに従って性犯罪の数が減少するという、非常に興味深い調査結果が出ています。日本のデータからも同様の傾向が結論できるのではないかと



資料 11

うことで、現在調査しているところです。

時代の変化とともに、従来では議論されなかった人々の性教育ニーズにも関心がもたれるようになってきました。たとえば、精神障害や身体障害のある人々、あるいは高齢者の人々です。性的な活動は、年がいったから、何歳になったからといって終わるわけではありません。障害をもつ人々も同じように、性的ニーズがあります。障害者と性については、専門分野として確立されており、特別な研修を受けた人々がこの教育や支援に取り組んでおられます。その他にも、たとえば乳がんや前立腺がんとセクシュアリティといった話題があります。

■ 性の多様性について学ぶ、教える

私は、同性愛やトランスセクシュアルについても教えていますが、もう1つの重要なテーマが、インターセックスです。性教育では、非常に広範なジェンダーについての事柄、あるいは性に関する活動について網羅する必要があります。

トランスセクシュアルについては、現在では、世界中のどこでも確認できる現象であることがわかっています。しかし、同じトランスセクシュアルでも、性器の形状を男性（女性）から女性（男性）のものに変えたいと思う人もいらっしゃるなど、さまざまです。

インターセックスについて、少しご説明したいと思いますが、出生前、私たち全員の性器は、一番上の絵のような状態（資料13）、女性器でも男性器でもない状態にあります。しかし、妊娠6週目～12週目あた

りになりますと、性分化が始まります。左の方向か、右の方向に分化が始まるわけです。

しかし、「自然は多様性を愛でる」(Nature loves variety/diversity.) ものなのです。出生時の性器は、一番下の右と左の2枚目の絵にある形状のみならず、その間のあらゆる形状がありうるわけです。外性器だけでなく、内性器にも多様な形状もあります。精巣が1つと卵巣が1つという「真性半陰陽」の状態もあります。

私たちの性別は、性器の形状に基づいて宣言されたものです。しかし、ジェンダーは性器で決まるわけではありません。最重要である、一番メインとなる性器は、股間の間にあるもの（性器）ではなく、耳の間にあるもの（脳）なのです。

変化は、非常にさまざまなところで起こっています。女性の社会進出が進み、従来、伝統的な男性職業とされてきた仕事に就く女性たちも増えてきました。伝統的には女性職業とされてきた仕事に就く男性も増えています。性教育に携わる人々が明確に認識しておかなければならないのは、「多様性」です。

■ 性教育の3つのルール

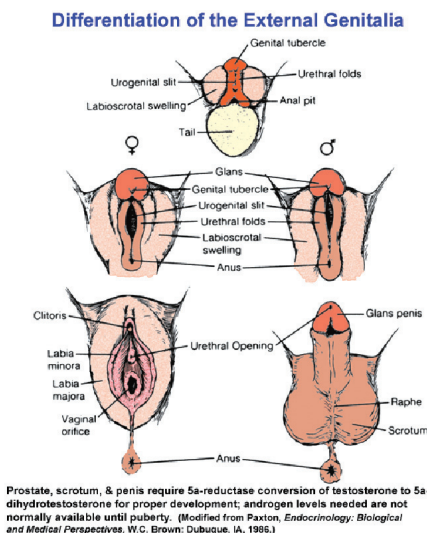
最後に、皆さんに「性教育の3つのルール」をお伝えしたいと思います。

1つは、性に関して単純な事実というものなどない、ということです。すべての事実は、人や社会の態度と感情に彩られているものなのです。

2つ目は、真実を見分ける力が必要だということです。私たちはよく平均値だとか、全体的傾向について話をします。そして、私たちの多くは自分を基準にしがちです。しかし、「こうであるかもしれないこと」と「こうあるべきだと思うこと」には、明確な線引きが必要です。

3つ目に、私たちは性に関する知識と態度、そして実際に行われる行為のすべてが調和している思いがちです。しかし実際には、これら3つの要素は独立したもののなのです。

性教育の価値とは何でしょうか。性科学の価値とは何なのでしょう。少なくとも、性教育や性科学はお金が儲かる仕事ではないでしょう。けれども、人生をより豊かに、幸せなものにすることができるものなのです。



資料 13

ニューヨーク リポート

セクシュアリティに関する
日本の「いま」

日本に帰ってきてテレビを見ると最近はずいぶんマツコ・デラックスだとかはるな愛だとか楽しんごとか、かなりの数の性的マイノリティーの人々がいたところで活躍していて、日本社会の受容度もずいぶん増したのかなと思ってしまいます。でもそのうちに若干の違和感を覚えるようになりました。彼らのこの受け入れられ具合は、欧米でのLGBTの受け入れられ具合とはなんだか違ってると気づいたからでした。

先日、元祖・女装家ともいべき三橋順子さんとお話しする機会がありました。三橋さんは大学で日本における性別越境の社会・文化史を教えていらっしゃるのですが、最近、ある学生のレポートにハッとしたそうです。それは「男が男を好きになるというのは性同一性障害だが……」と書き出していたというのです。同性を好きになるのは「同性愛」です。しかし日本ではなぜか、そしていつからか、それが「性同一性障害」であるとして受け取られるようになっていく……これはどういうことなのでしょう？

欧米の現代の性的少数者の人権運動は、ご存じのように1969年のニューヨーク・ストーンウォールの反乱から始まりました。以来、同性が同性を好きになる同性愛は、報道界や映画・テレビなどの娯楽業界をも巻き込んで懸命に脱・異常化、脱・病理化の道を辿りました。つまり彼らも同じ人間だ、というふうに。

ところが日本ではそういうことはほとんど起きませんでした。同性愛は90年代に入っただけで、あのとんねるずの保毛尾田保毛男（ほもおだほもお）に象徴されるような、からかい、存分にいじめてもよい気持ち悪い存在であり続けたのです。そんな中で2003年、性同一性障害特例法が成立したのです。

今度は違いました。新聞やテレビがこれをこぞって取り上げ、ニュースだけではなく「まじめな」ドラマもその成立前後に数多く作られました。「金八先生」

にさえこの性同一性障害が登場したのです。ここで日本の性的少数者はゴソッと一気にこの「障害」の概念にすくいとられてしまったのです。

そこで見られる受容の心理は、端的に言えば「あの人たちは」は障害をもったかわいそうな病気の人たちだ、というものでした。「私たち正常な人間」は心を広くもって「そんな人たち」までも優しく受け入れてやらねばならない――。

じつはこれは欧米におけるLGBTの受容とはベクトルをまったく逆にするものです。米国を例にとると、50年代から60年代にかけて黒人たちの公民権運動が盛り上がり、次いで女性たちの解放運動が続きました。そして70年代からの同性愛者たちの人権運動です。これらはすべて、歴史の主人公だった白人異性愛男性への挑戦、白人男性に象徴される米国のメインストリーム社会への下克上だったのです。

白人男性はそれまで、多数派の権力者として黒人や女性や同性愛者たちを思いのままに語ってきました。一般社会での話者主体はつねに白人男性で、黒人・女性・同性愛者たちは目的語でしかなかった。その目的語たちが今度は白人男性たちと同じ人権を得て、つまりは同じ主語の地位を得て、白人男性たちを目的語にし始めたのです。それは主客転倒の、あるいは少なくとも主客機会の均等化という意味での、平等の革命でした。白人男性たちはそうして主体の変容を強いられたのです。白人男性たちも結果として、図らずも主語の硬直さから解放されたのですが。

ところが日本では、「私たち正常な人間」は社会の主人公のまま安泰です。性的少数者たちはちょっとビョーキの変な人たちとして、目的語の地位から逃れられていません。マツコも愛ちゃんもしんごくんもその異端さを慰み者のように消費されているのです。

そんなセクシュアリティに関する日本の「いま」を、アメリカからの視線も通して、またアメリカの動向も含め、このコラムで描いていきたいと考えています。

きたまるゆうじ ニューヨーク在住（18年）ジャーナリスト／作家／元・中日新聞（東京新聞）ニューヨーク支局長。

「ありのままのわたしを生きる」ために



第1回

自分史の試み —まずは親のことから—

土肥いつき

京都の公立高校教員。24 時間一人パレード状態の MtF トランスジェンダー。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

わたしは 2009 年 4 月から 2 年間、『現代性教育研究月報』に文章を書かせていただきました。「何を書いてもいい」という大胆な依頼だったので、学校や交流会で会う生徒たちをはじめ、さまざまな人々との出会いを紹介することを通して、わたしの日常やふだん考えていることを伝えてみたいと思いました。

ところが、連載が終わりにさしかかった頃、編集の方から「いつきさん自身のことをもっと書いてほしい」と言われました。その時「自分史を書くしかないなあ」と思いました。と同時に、「それってうさんくさいなあ」とも思いました。なぜなら「ウソが混じるかも」と思ったからです。確かに「自分史」にウソはありません。しかし、そこからどんなエピソードを拾いあげ、それをどう表現するかということは、「現在のわたし」の評価を通してされる恣意的な作業になります。でも、逆に言うならば、自分史を書くことを通して、現在のわたしを書くことができるかもしれないと思い直しました。ところで、わたしは、誰もが自分史の「主人公」であると思っています。波瀾万丈な人生を送る人はたしかにいるものの、ごく少数です。ほとんどの人は、淡々とした日々の中に、小さな喜びや小さなしんどさを感じながら生きているんだろうと思います。わたしもそんなひとりです。とてもではないけど、波瀾万丈な人生とは言えないわたしの自分史をできる限り正直に書くと、おのずととても退屈な文章が続くと思います。それでもしばらくおつきあいしたいと思います。

わたしは 1960 年代前半に京都で生まれました。

父親はキリスト教の歴史の研究者をしていました。わたしが物心ついた頃から、家には父親のゼミの学生がよく来ていました。そこには、激しい議論をする学生たちに混じって、本気でその議論に参加している父親の姿がありました。一方、母親は戦前生まれとしては珍しく国立の教育大学で数学を研究したあと、結婚前は小学校の教員をしていたようです。数学を好み、音楽を好み、文学を好み、星を好み、植物を好む。そんな天真爛漫な人です。

両親はとても大切にわたしを育ててくれました。家には中古の白黒テレビはありましたが、テレビの思い出はほとんどありません。どちらかというと、両親と一緒にトランプやダイヤモンドゲームやチェスをした記憶のほうが強くあります。両親はわたしにとってもたくさんの時間を割いてくれたんだなあと思います。わたしはそんな両親の影響を強く受けながら育ちました。

星が好きで、音楽が好きで、文学が好きなわたしは、まぎれもなく母親の影響を受け、現在数学の教員をしています。もっとも、植物好きだけはどうにもついてはいけませんでした……。

一方、社会へのわたしのものの考え方は、まぎれもなく父親の影響です。わたしの原体験のうちのひとつに「両親に手を引かれて、京都の繁華街を青空の下歩いている」というものがあります。しかし、京都の繁華街は基本的にはアーケードです。では、なぜ青空か。どう考えても、車道を歩いていたとしか考えられません。時代を考えるならば、どうやら「ベ平連（「ベトナムに平和を！」市民連合）」のデモだったようです。

ある時父親に「尊敬する人物は誰だ」とたずねたことがあります。すると父親は「田中正造」と答えました「田中正造＝足尾鉍毒事件」程度しか知らなかった当時のわたしは、父親のことを「えらいマニアックなヤツやなあ」と思ったことを覚えています。しかしその後、部落の歴史を学ぶうちに、わたしは再び田中正造と出会います。このことは、そのうち書きたいと思います。あるいは、歴史の研究者である父親に「歴史とはなんぞや」という無謀な問いを投げたことがあります。父親の答えは「歴史とは右往左往するものである」でした。そして「歴史とは発展するものではなく、展開するものである」と説明してくれました。この言葉は、わたしに「人々が生きることとはどういうことか」ということと同時に「ひとりの人間が生きることとはどういうことか」ということを教えてくれました。

このような両親に育てられた小さい頃のわたしについて、次回書こうと思います。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

薬物の光と影

東日本大震災の直後に読むと、本書『〈麻薬〉のすべて』のあとがきは、まるで予言のような示唆に富んでいる。「対応を誤ってしまったら麻薬や原子力は間違いなく人類を滅ぼす可能性を秘めている。今、人類にはヤク（薬）とカク（核）との付き合い方が真剣に問われているといってもよい」

たしかに核に関しては、私たちは福島原発の事故を目の当たりにし、今後、その利用について再検討がなされることは間違いないだろう。一方、本書のテーマであるところの〈麻薬〉は、いまだ検討すべき課題として国民的な関心を集めているとはいいいがたい。芸能人のスキャンダルとして話題になることはあっても、多くの国民にとって薬物使用の問題はまだ自分とは遠い世界のお話のように感じられているのではないか。

しかし実態は少々異なってきている。『データで見る、ゲイ・バイセクシャルと HIV / エイズ情報ファイル 2010』（エイズ予防のための戦略研究 / MSM 首都圏グループ）によれば、ゲイやバイセクシャル男性の過去6か月間のセックス時のラッシュ・5meo・覚せい剤・その他のセックスドラッグ使用経験は、全体で18.9%、約5人に1人は使用したことがあるという結果が出ている。そうした増加傾向はセクシュアリティに関わりなく、「全国15歳以上の住民の違法薬物の生涯使用経験率」（厚生労働省 2009）という調査でも、有機溶剤、大麻、覚せい剤等々のどれかを使ったことがある人の割合は、2009年で2.9%に上がってきている。

こうした状況のなかで私たちがすべきことは何なのか。それはドラッグから目をそむけることではなく、まず、それらについて知ることではないか、というのが本書のテーマの1つだろう。たしかに、何も知らずにただ禁止だけが押しつけられるとき、人は手を出さ



〈麻薬〉のすべて

船山信次著
講談社現代新書
798 円

ないという選択をするだけではなく、反対に、それに魅力を感じてしまう面もある。実際、青少年がタバコに手を出すときには、その効能自体よりも、悪いことをしているという背徳感に背中を押されるものだ。

そういう意味では、博物学的にそれらについて説明してくれるこの本から得るところは多い。ある薬物がどのように生まれ、使用され、どうして禁止されるに至ったのか、その背景まで含めて説明してくれるからである。例えば、ヘロインはモルヒネのアセチル化によって得られる薬物で、そもそも1899年にアスピリンと同時にバイエルン社から発売された鎮咳剤だった。その効能も大きかったが、しかしすぐに依存性や禁断症状があることがわかり、禁止されるに至った。が、世界では現在もっとも大量に出回っている「依存性薬物」なのだそうだ。

本書に記されている、戦争と薬物との関係も興味深い。11世紀、イスラム教徒のなかで他民族を虐殺した暗殺団の名前が、ハッシッシュの使用を意味していたという事実。アメリカの南北戦争でも、国内のモルヒネ中毒者が増加した。日本では明治期に国内で覚せい剤が生み出され、それはやがて戦時の工場労働や特攻隊などでも用いられることになった。そして軍が保有していた覚せい剤が戦後市中に放出され、ヒロポンという名で依存者を急増させたという。

しかしそもそも薬物に悪や善は関係ない。モルヒネに見られるように、使用法によっては医療に役立つものもある。アルコールなどは、過ぎた飲み方をしなければ日常生活にリラクゼーションを与えるよい面もある。問題はその薬物の光と影の面をちゃんと理解し、適切に用いること、そして用いないことである。

実のところ、いたずらに恐怖心を煽り立てるよりも、客観的な事実をつまびらかにされるほうが、恐ろしさも確実に伝わる。そのことを本書ははっきりと証明してくれるだろう。 （評論家 伏見憲明）

4 / 30 (土)

9:30~17:25

“人間と性” 教育研究協議会 「2011 性の基礎講座」

【テーマ】講座「日本における性教育の課題をその歴史から考える」田代美江子（埼玉大学）、「性教育の実践で子どもの笑顔が輝くとき」中野久恵（元養護教諭）、「教える側が学びたい『セクソロジー』って？」渡辺大輔（千葉大学）、「障害児の性教育から、性教育をとらえ直してみる」永野佑子（性教協障害児サークル）、「いま、子どもの現実を前にして、性教育で語ってみたいこと」塩塚秀美（小学校教員）、ほか。

【会場】埼玉大学総合研究棟シアター教室
埼玉県さいたま市桜区下大久保 255

【問い合わせ先等】参加費／一般 4,000 円、会員・『季刊 SEXUALITY』定期購読者 3,000 円、学生 1,000 円。定員／150 名。
問合せ先／〒151-0073 東京都渋谷区笹塚 1-56-6
クレセントプラザ笹塚 60 C “人間と性”教育研究協議会
TEL 03-3379-7556 FAX 03-3379-7561

5 / 15 (日)

9:00~17:30

第 29 回 東京母性衛生学会 学術集会

【テーマ】「よりよい妊婦健診体制の確立をめざして」
【内容】会長講演「母子健康手帳の今昔～古くて新しい情報伝達ツール～」松田義雄（東京女子医科大学）、緊急報告「新生児蘇生法 NCP2010 の紹介」正岡直樹（東京女子医科大学八千代医療センター）、教育講演「わが国における DOHaD 研究の課題と展望」板橋家頭夫（昭和大学）、シンポジウム「妊婦健診体制のほころびを補強する」演者：飯田真美（東京都福祉保健局）・水主川純（国立国際医療センター）・中嶋彩（東京女子医科大学）・石川紀子（恩賜財団母子愛育会愛育病院）・大浦訓章（東京慈恵会医科大学）、ほか。

【会場】東京女子医科大学 弥生記念講堂
新宿区河田町 8-1（若松河田駅徒歩 5 分）

【問い合わせ先等】参加費／事前：一般 4,500 円、学生 2,000 円、当日：一般 5,000 円、学生 3,000 円。問合せ先／〒162-8666 東京都新宿区河田町 8-1 東京女子医科大学 産婦人科・母子総合医療センター（担当：牧野）TEL 03-3353-8111
FAX 03-5269-7615 E-mail tsmh2011@gmail.com



6月4日 (土) 11:30 ~ 16:40

6月5日 (日) 9:30 ~ 16:45

GID（性同一性障害）学会第 13 回研究大会 ～ GID 医療をより身近なものに～

※第 13 回研究大会は、東日本大震災の影響を考慮し、
6月4日 (土)・5日 (日) に延期になりました。

【テーマ】1 日目：講演「私が GID 診療に取り組んだ理由」山口悟（ナグモクリニック名古屋院長）、シンポジウム 1 「生殖医療の現状と問題点」、シンポジウム 2 「DSM5 案の診断基準に見られる GID 概念の将来」、シンポジウム 3 「特例法の現状と問題点」、ほか。2 日目：シンポジウム 4 「児童・思春期の GID への対応～教育と医療の現場から」、特別講演「乳房形成術と私」南雲吉則（ナグモクリニック）、シンポジウム 5 「地方の GID 診療の現場から」、シンポジウム 6 「GID の外科療法について」、ほか。

【会場】ゲートシティ大崎 B1 階ゲートシティホール
（JR 大崎駅新東口徒歩 1 分）

定員・参加費・問い合わせ

参加費／当事者・家族・友人・学生：2,000 円、その他：8,000 円。
問合せ先／運営事務局（株）ウィアライブ コンベンション事業部
TEL 03-3552-4170 FAX 03-3552-4178



6月4日 (土) 9:00 ~ 20:00

日本「性ところ」関連問題学会 第 3 回学術研究大会

【テーマ】「現代人の性ところ～女と男のゆくえ～」

【内容】講演「性犯罪者治療の現在：リラプス・プリベンション・モデルを中心に」原田隆之（目白大学）、「セックスの人類学」奥野克巳（桜美林大学）、「20 代女子のココロの変化と『草食系男子』」牛窪恵（(有)インフィニティ）、現代のトピックス「性同一性障害治療における基本的な考え方」塚田攻（埼玉医科大学かわこえクリニック）、シンポジウム「女と男のゆくえ」、ほか。

【会場】ホテルメトロポリタン
（東京都豊島区西池袋 1-6-1）

定員・参加費・問い合わせ

参加費／事前：一般 5,000 円、学生 2,000 円、当日：一般 6,000 円、学生 3,000 円。
問合せ先／日本「性ところ」関連問題学会 第 3 回学術研究大会事務局 〒171-0021 東京都豊島区西池袋 1-2-5 医療法人榎本クリニック（担当：松井）
TEL 03-3982-5345 FAX 03-3982-6089
E-mail sei-kokoro1@enmoto-clinic.jp